

生物学は存在論的に思考しなかったか？

森 秀樹（兵庫教育大学）

「[生命を] 把握し、解釈しうるようになるための順序からすれば、「生命の学問」としての生物学は……現存在の存在論に基づいている。生命は独自のあり方をしているが、その本質は現存在においてのみ接近可能である」（SuZ49f.）。ハイデガーは生命という概念を存在論的に問い直すことを主張する。確かに、現前性に基づく思考のあり方が存在一般の意味の地平たる時間の観点から再検討されねばならないというのはもっともである。しかし、生物学は生命の動的なあり方を探究してきたのではなかったか。

ハイデガーによる動物論としては、『形而上学の根本諸概念』におけるものがよく知られている。そこでは、石は無世界的、動物は世界欠乏的、人間は世界形成的であるとされる。そして、ハイデガーは、動物の世界の乏しさについて解明するために、ドリーシュの生氣論とユクスキュルの環境世界論に言及しつつ、それらの限界を指摘している。だが、ハイデガーの動物論は、初期のアリストテレス解釈、1928年のライプニッツ講義、1938/39年のニーチェ解釈という風に『存在と時間』の前後にまたがっている。動物論は、ハイデガーの思索の変様と呼応しあうように、各時期において力点を変えながら、継続されている。

さて、生物学は生命の存在論を考えることを回避してきたのか。フォン・ベアは胚の観察から一般的な形態から特殊な形態が発生していくという原則を見だし、後成説を補強した。これを受け継いで、ドリーシュはウニの卵割の実験から、卵割の初期の細胞は相互の位置関係によって発生のあるき方を変える調和能力をもつことを示した。種に固有な形態は遺伝的な要素と環境的な要素との相互関係の中で階層的に形成されていくというのである。彼はこのような発生を可能にする原理をエンテレヒーと名づけ、生氣論を主張したが、機械論の立場からは批判を受けることになった。そこで、機械論と生氣論の対立を調停するものとして動物行動学者モーガンや生理学者ホールデンは創発主義を主張し、ブロード、アレクサンダーといった哲学者に影響を及ぼした。ただし、創発という概念を用い始めたのはルイスである。彼はこの概念をフォン・ベアからの影響の下、スペンサーとの交流の中で形成したが、スペンサーはベルクソンの思想形成においても一定の役割を果たした。発生学からの影響は、生物学のみならず、哲学にも及んでいる。

スペンサーの「総合哲学」全体のテーゼは「同質的なものから異質的なものへの分化」である。環境の変化によって引き起こされた分化がさらなる分化を誘発し、その連鎖が動的平衡状態に至るまで進行するというのである。彼はこれを進歩の法則であるとして、星雲、地球、生命、心理、社会などの事例に適用している。例えば、彼は生命を「外界との関係に内面での関係が適応し続けること」と定義する。その進化の過程において、神経系や運動系といった諸器官が分化していくが、そのようにして形成された諸器官はさらに、感覚や思考という新しい次元を生み出し、より複雑な仕方での適応が可能になっていく。

ハイデガーの思想をこのような発生学の影響圏内にあると見なすこともできる。そして、

創発の多層性という観点から彼の動物論を再解釈することで、動物論に見られる変様を整理することができる。例えば、ハイデガーは動物と人間とを対比することで、世界による開示が、乏しいものとなる場合と世界形成的になる場合とを分節してみせた。だが、このような思索はさらに、動物における世界の開示が世界形成的となったり、人間における世界の開示が乏しいものとなったりする状況を検討する可能性を切り開くことになる。また、『存在と時間』のハイデガーは生物学と哲学の対比によって、超越論的存在論という課題を明確化した。そのことは逆に、哲学が忘却することになるものを露呈させてもいる。現存在が何かを開示しようとするにおいて必然的に隠されるものがある。やがて、彼はそのような事態に注目するようになる。スペンサーもまた「知りえぬもの」との関係を考えようとした。ただし、それは科学と対立する営みではないとしている。というのも、科学もまた経験を超越するものとの関わり方を創発する営みだと考えるからである。生命の発生という現象は、その現象の解明を人間に迫るとともに、存在論を展開させる役割を結果として果たしてきたとも言えるのではないか。